

めあてを追求する音楽科の授業構成

— 4年「リズムアンサンブル」を通して —

木村 敦子

1. 中学年におけるめあて追求

音楽に対して思い描いたイメージは、表現活動への動機づけとなる。そして、自分のイメージに合った表現ができた時、誰でもが快いと感じることができる。この「快」の感情が次の表現活動へのエネルギーとなっていく。そこで、これまでは音楽に出会った時の感動を重視し、イメージ→表現のつながりに着目してきた。さらに、より大きな音楽的満足感を味わうためには、イメージ→表現→イメージ→表現→…といったフィードバックが必要となってくる。

中学年になると、一単位時間内だけでなく、一題材を通してイメージに立ち返ってのフィードバックが可能になってくる。このフィードバックは、次のように捉えることができる。

- 「こんな感じにしたい」というイメージとしてのめあてと「このような表現をしてみよう」という具体的な表現方法とを結びつけることができる。
- これまでの経験をもとに自分たちの表現を工夫していくことができる。
- いろいろな表現の鑑賞を通して、自分たちの表現がよりイメージに近くなるにはどこをどうするかということが具体的にわかる。

これらのことは、必ずしも「こうしよう」といったようなことばで表わしていくことを意味しているのではない。ここでは、ことばにはでないが、子どもたちの意識の中に「こうしてみよう」という音楽表現に対する自分なりの方向をもてるのが大切であると思われる。

2 めあてを追求する場の工夫

以上のようなことを受けて、子どもたちが活動に取り組む場を設定する際、次の点について考えていく必要がある。

- 経験の活用——子どもたちが自発的に表現活動に取り組んでいけるためには、実態を的確に把握した上で、子どもたちがこれまでに持っている経験を活用でき、子どもたち自身で「あのようしてみよう」と取り組んでいける活動、しかも音楽的な緊張感のもてる活動から設定していくことが要求される。これには、子どもたちの力で創意・工夫できる余地のある教材選択あるいは教材提示、指導の仕方が関わっている。
- 活動の評価——評価は表現意欲を喚起するだけでなく、自分たちの表現の音楽的価値を認識していく上でも重要である。最初に描いたイメージが表現に生かされていくには、自己評価であっても指導者からの評価であっても「何かができたかどうか」ということよりも「イメージにあったかどうか」「楽しい活動であったか」という点を重視して行なっていく必要がある。
- 技術的な問題——イメージにあった表現ができない要因として技術的な問題がある。技術的なことは、豊かな音楽表現をしていくための手段として子どもたちが身につけていく必要はある。しかし、それはあくまでも手段であって目的となってしまうと、本当の音楽的な喜びを味わうことはできない。つまり、活動が技術向上のための単なるトレーニングであってはならないのである。一回一回が音楽的であり、楽しい活動である、その結果として技術の向上がみられるような活動の場を設定することが必要である。特にリコーダーを導入する中学年においては留意していかなければならない点である。

これらのことに加え、中学年は、他者へ関心を持ち、他との関わりの中で活動できてくる時期であることを考慮して、授業構成をしていくことがたいせつなポイントである。

3 指導事例——4年生「リズムアンサンブル」の実践を通して

(1) 題材について

子どもたちの「こんな表現をしたい」という気持ちが、表現の工夫となってあらわれてくるためには、それまでの音楽経験がいかに活用されるかということ、イメージに照らして自分たちの表現をフィードバックしていけるかということに関係していると思われる。そこで、本題材では次のような仮説に基づいて授業を構成していく。

仮説Ⅰ

子どもたちがもっている既習の経験をもとにしてできる活動を段階的に設定すれば、子どもたちが自分たち自身の力で表現の工夫をしていくことができるであろう。

仮説Ⅱ

どんな音楽にしたいかという観点から表現を評価していくことで、最初に描いたイメージを持続させて表現の工夫をしていくことができるであろう。

本題材は「つり橋わたれ」（中山知子作詞・オルフ「子どものための音楽」より）をもとにリズムアンサンブルをしていくものである。教材曲「つり橋わたれ」は、五音音階でできた遊び歌でオスティナート伴奏や手拍子リズムによる間奏を工夫していけるものである。ここでは、間奏をリズムアンサンブルへと発展させていく。アンサンブルグループは一人一人の工夫が表現に生かせるよう4～5名の編成とする。

本題材に関連した児童の実態は、次のようである。

- 拍の流れによってリズムエコー、リズムロンドができる。
- リズムの変化で曲想が変わることが分かる。
- 音楽の山と強弱、速度の変化を関連づけることができる。
- 互いの音を聴き合ってアンサンブルしようとする。

指導にあたっては、次の点をねらっていく。

- グループで協力して、イメージにあった表現の工夫をしていこうとする態度を養う。
- イメージと音楽の要素を関連づけて表現できるようにする。
- 音楽の構成を工夫したアンサンブルができるようにする。

(2) 指導計画

第一次 「つり橋わたれ」の曲の楽しさを味わう。（1時間）

第1時…範唱用レコードの鑑賞、視唱によって曲のもつ楽しい雰囲気味わうとともに、間奏のおもしろさに気づくことができるようにする。教科書に提示されたリズムパターンだけでなく、いろいろなリズムを重ね合わせて間奏の部分を演奏する。

第二次 グループごとに間奏の部分を構成する。（2時間）

第1時…グループ内で一人一人のリズムパターンを作る。そして、一つずつ順番に重ね合わせて、聴き合う。

第2時…一人ずつのパターンがきまったら、リズムの組み合わせを考えて曲の構成をしていく。構成は、図式の楽譜に記入する。

第三次 自分たちのグループのイメージにあった表現になるよう工夫する。（3時間）

第1時…どこに音楽の山をもってきたいか、終わり方はどうするかによって強弱や手拍子の音色を工夫していく。

第2時…「つり橋わたれ」の歌をいれて中間発表し、相互鑑賞する。曲に変化をもたせているところ、リズムの組み合わせのおもしろさを聴き合う。

第3時…発表会をしてよいところを聴き合う。

(3) 指導の実際 (第三次・第1時)

学 習 の 流 れ	児 童 の 動 き	留 意 点
<p>前時にできたアンサンブルをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ グループの一人一人がリズムを合わせていけるよう、声にだして拍子を数える、小節の節目に番号をつけるフレーズごとにつけ声をいれる、などの工夫がみられる。 ◦ リズムを合わせてみた上で一人一人のリズムやアンサンブル形態の修正を行なうグループもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ なかなか合わないグループに対しては、もう一度一人一人のリズムを聴き合うこと、一人ずつ順番に重ね合わせてみることを助言する。また、指導者も一緒にアンサンブルに加わる。 ◦ アンサンブルで大切な点として個人のリズムの複雑さより組み合わせのおもしろさに着眼した評価をする。
<p>自分たちのイメージに合う表現になるよう工夫する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 工夫点として次のようなことが出される。 <ul style="list-style-type: none"> • 音楽をもりあげるところでだんだん強くしていく。 • だんだん強くして一番強くなったところから急に弱くしてみる。 • 同じパターンが繰り返される時は強さを変化させてみる。 • 終わり方は一人ずつはいてもりあげる。 • 反対に一人ずつやめて消えるようにする。 • 手拍子の音色にも変化をもたせていく。 • 音のない部分をつくり、構成に変化をもたせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ グループでどんな音楽にしたいかとういことを話し合う手だてとして <ul style="list-style-type: none"> • 音楽の山をどこにしたらいいか • どのようにしたら気持ちのよい終わり方ができるか。 ◦ といったことを提示する。 ◦ 工夫した点は楽譜に記入して試行、修正できるようにする。
<p>グループで本時の評価をし、次時の課題を設定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 各グループから出された課題は大きく次のようなものである。 <ul style="list-style-type: none"> • みんなでもっと合うようにする。 • 強弱が表現できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 本時の活動は次の観点からグループ内で評価していく。 <ul style="list-style-type: none"> • 音楽の山が自分たちの思い通りに表現できたか。 • 終わった感じがだせたか。 • グループで協力して活動できたか。

(4) 考察

① 仮説1について

活動の場の設定で大切なことは、子どもたちの意識が「こんなふうにやってみよう」と方向づけられ、高まっていくことである。そのためには、子どもたち自身が活動の見通しをもって取り組めるようにすることが必要である。そこで本題材ではリズムアンサンブルをしていくまでを次のような過程で設定した。

活 動		活動中にみられた 子どもの意識
既習の活動	新しい活動	
2つのリズムパターンを合わせて うつ。		自分たちでも作っ てみたい。 おもしろいアンサ ンブルにしよう。 みんなで合わせや すいようにしよう。 かけ声をいれてみ よう・指揮をして みよう。 手拍子の強さを 変えてみよう。 もりあげて終わろ う・消えるように 終わろう。 強さ・速さを変 えてみよう。 聴いてもらいたい。
	↓	
いろいろなリズムパターンをうつ。		
	↓	
	複数のリズムパターンを1つずつ 重ね合わせる。	
	↓	
自分が受け持つリズムパターンを 作る。		
	↓	
グループで一人一人のリズムを順 番に重ね合わせる。		
	↓	
	グループでリズムを組み合わせて アンサンブルを構成する。	
	↓	
	図式の楽譜を作る。	
	↓	
グループで合わせる工夫をする。		
	↓	
音楽の山を工夫する。		
	↓	
	終わり方を工夫する。	
	↓	
	音楽の変化について工夫する。	
	↓	
	アンサンブルを発表する。	

図1および図2はアンサンブルの例である。図1のグループは音楽の山に向かってクレッシェンドすること、終わりをもりあげること、おなじパターンがでてきたら強さ・音色を変えることを工夫点としてあげている。図2のグループは音楽の山や強弱、終わりをもりあげること、速度を変化させることに加え、全く音のない部分をつくることで緊張感のある音楽の構成にしている。

このようにどのグループもそれぞれ工夫した表現になった。活動への取り組みも、どんな表現にするかという点で試行修正を重ねることができた。これは本題材が比較的技術を要しないものであったことも一因であるが、活動中にグループの進度に応じて自己評価の場面をもっていったことが効果的であったと思われる。

4. まとめ

子どもたちが創意工夫して表現できるためには、以上述べてきたことを授業づくりのポイントにしている。しかし、創意工夫できる場を設定しようとしても、それ以前にたくさんの楽しい音楽経験を積み重ねていなければ、子どもたちは自主的・意欲的に活動することはできない。たとえば、リコーダーの苦手な子どもが主旋律は吹けないが自分に吹けそうな副旋律を吹いて合わせたら、とてもきれいな音楽になって楽しかった、という経験をしていれば、次に同じような場面に出会った時には、自分から「またあのようしてみよう」と工夫することができるのである。音楽は、楽器が上手にできるとかよい声で歌えるという価値観とは別に「快い・楽しいもの」であることに存在意義があるものと考えられる。

そして、活動が「快い・楽しいもの」となるためには、もう一つたいせつな条件がある。それは、どんな表現も受け入れることのできる支持的風土である。特に、他者との関わりの中で活動しているとする中学年以降は、さらに研究していく必要のある課題であると思われる。